

中央労働災害防止協会 五十嵐 晃 一

止協会内関係者に配布し、その内容について対応を協議の上参加した。内容を簡単に紹介すると、

- 1) SHE の統合は進めるべきである。
- 2) SHE と品質（以下 Q と略す）の統合は慎重にすることが望ましい。
- 3) 統合システムの基本としてレスポンスブルケアを推薦。
- 4) トップマネジメントの熱意と参加が最重要である。

セッションII 産業における SHE マネジ メントの統合

以後セッション5までは5～7名の発表者が20分程度のプレゼンを行ったのち、そのまま壇上にとどまり、終了後、会場を含め討議を行うというパネルディスカッション方式をとり入れたやり方である。

(1) Hyuck - myun, Kwon (KOSHA - 韓国)
「GIS に基づいた統合リスクマネジメントシ
ステム (IRMS) の確立」

発表者はデウ自動車で15年勤務したのち、1995年 KOSHA に引き抜かれた形で勤務している。IRMS (Integrated Risk Management System) は最初安全向けだったが、環境向けにも使える。頻度と結果を掛け算してリスクを計算する。493サイトから成るデータベースを作成した。さらに事件事例データベース韓国国内外で1,800事例作成した。これから最悪シナリオを作成した。リスクマップ GIS データ、プラントレイアウト、従業員データ、事故予防と緊急対応、FTA、ETA等を含む。

(2) Barry Dyer (化学産業協議会, ニュージーランド)「SH&E パフォーマンスを統合することのメリットと問題点—ニュージーランドの経験」

安全衛生と環境は伝統的に、違う法制のもとで別の政府部局の方針で行われてきた。これが産業にも反映され、SHEが全体として取り組まれることはなかった。また安全衛生に関しては法制と最適慣行、COPが異なっていた。SHEの統合に

より、これらが解決される。まず産業が統合システムを開発し、自主的に要求を満足する対応を行えば、政府も民間の自己管理を受け入れ、規制緩和に進むことになろう。この際、レスポンスブルケアシステムがモデルになる。レスポンスブルケアは狭い範囲にとどまっているが、化学業界だけのものにしておくのはもったいない。

(3) Chris van Lint (Bayer, 香港)「現在行われている国際 SHE マネジメントシステム標準の完全統合」

バイエルは世界各地に事業所を持つ。Complianceが原動力であったときのシステムは、国ごとに違っていたが、独自の包括的 HSE 管理システムを作り上げた。これは16の要素（従来の安全衛生・環境の要素だけでなく、リーダーシップ、カルチャー、調達、採用、操業といった要素も入れたもの）で構成される。全世界のバイエルの好事例も含む「実施ガイド」をつくり、評価を原動力としたアプローチを進めている。今年末まで完全な統合マネジメントシステムを全工場で行い、おなじ HSE 管理が実施される予定とのことである。

(4)町田静治 (ILO) 「ILO の OSHMS に対する技術的ガイドライン」

これまでの経緯と内容を述べたもの。(省略)
(近々中災防で翻訳したものを発表の予定)

(5) Bob Smerko (塩素協会, 米国) 「塩素産業のための SHE 統合」

Ohio 大学で化学専攻後、Bethlehem Steel を
経由して1986年以来現職。

228会員。12人の事務局。350人ボランティア。
安全・環境表彰等々協会の紹介が多い。本大会の
テーマとの関連としては、それらの活動がどのよ
うに SHE に寄与しているかというような話であ
る。

(1) Ken-ho Huang (LG-カルテックスオイル
株, 韓国)「LG-カルテックスオイル株の EHS
& Q マネジメントシステム CIMS」

(2) Christian Kirchsteiger EU (ジョイント研究センター)「整合リスクアセスメント方法にむけての EU 政府の取り組み」

これよりさらに進んですべての「不確かさ (uncertainty) を対象にしたものを作ろう」という提案がなされた。プロジェクトの内容は研究センターの web (<http://mahbsry.irc.it>) 参照。

(3) Michael Bahn (ヘンケル, ドイツ) 「ヘンケルにおける統合 SHEQ マネジメントシステムの実施」

(4) Wayne Bisset/Doug McCutcheon (カナダ, アルバータ大)「工科系学部学生に統合アプローチを教える必要性」

ISMLP の紹介。ISMLP (Integrated Safety and Risk/Ross Management Program) とは、学生は就職後に危険にさらされるため、在学中に SHE の知識を持ってもらおうとするプログラムとのことである。例えば化学専攻の学生は必修、電気の学生は選択科目というような運用で企業も社会もどちらもメリットがあるとしているとの報告であった。

(5) Gerry Montague (InfraServ Gendorf, ドイツ)「統合マネジメントシステム—中小企業のための経済的解決策」

筆者は、南ドイツの工業団地（製造業5社、サービス業7社で従業員4000名）と同じ場所にある、コンサルタント会社に所属しており、そのコンサルティングの体験に基づいた発表。全体観として、1997年のISO9000の歴史から振り返り、2005～2010年にはSHEQのISO規格ができるだろうと予測している。特に中小企業の観点から統合マネジメントシステムは必要であるとし、究極的には販売、倉庫、原価管理、情報、生産、財務等を含めたマネジメントシステムが必要としている。

(1) Barry Dyer 産業（化学産業協議会，ニュージーランド）「統合 SH & E 実施パフォーマンスのモニタリング」

— 46 —

うためである。

(2) Achim Storek (ニーダーザクセン州政府、ドイツ)「SHE への統合アプローチのなかでの、マネジメントシステムの監督・支援に関するニーダーザクセン州当局の将来の役割」

●安全衛生に関するドイツの法的要求の紹介—1996年の安全衛生法を基本とするものであるが、危険有害物質を一定量扱う特定の企業に対しては、EU セベソ指令に基づき2000年にプロセス安全管理が義務化された (全 EU 共通)。

●ドイツの SHE マネジメントシステムの概説—ASCA (ヘキスト社の事故に対するヘッセン州の手法)、OHRIS、BG の 5 ステップ、LASI 等

●こうした枠組みの中で、実際に企業を監督する立場の州政府が、one face, one customer 等、できるだけ統合した対応で行おうという努力を述べている。

(3) Young - soon, Lee 韓国 (ソウル大学)「SHE の統合マネジメントのための法規システム」

表題と違って、各マネジメントシステムの現状を述べ、それらの統合が望ましいとしているだけであって特に内容に見るべきものは少ないように思われる。安全、環境、品質それぞれに関係する法律の名前があげてあるのは実用的価値はあるかも知れない。

(4) Bill Finan 米国 (環境庁)「緊急時計画の法的要求遵守のための常識によるアプローチ：統合緊急計画が一つですむように」

米国企業は、各省庁や州政府からの要求を満たすために、たくさんの緊急時計画を策定しなければならない。発表者の知っている例でも、ある企業は22の緊急時計画を策定し、それらは単に役所向けで使用はせず、実際に使うのは23番目のものだということがあった。

これらの対策として、National Response Team (NRT) が作られた。これは、16の連邦機関 (OSHA, EPA 等) が集まり、一つのプランに統合する作業を行った。

成果としては良かった点もあるしそうでない点

もあった。統合を歓迎してこれに合わせる企業も多かったが、役所が最後には受け付けられないだろうという危惧のもとに、統合に新たなリソースをつぎ込むのを嫌がる企業もあった。企業内ですら、自部署の仕事を守るために他部と協力するのを拒むところもあった。

(5) Jurgen Wettig EU 政府 (環境)「EU における EMAS, 行政による環境マネジメントシステム実施の一例」

統合問題とは直接関係ないが、行政による環境マネジメントシステムの例として、行政が credibility を増そうという、また民間のやることと出来るだけ整合したことをやろうという努力を分かってもらおうとして出したと言う前置きがあった。内容は EMAS の紹介で、これまで2000社が登録されているということであった。

EMAS は1993年から実施しているため、ISO14000より1年早い。ISO14000のヨーロッパバージョンと見られているが、透明性確保の点ではより厳しい。これが ISO14000に取り入れられ、全世界向けになることを願っているとのことであった。

なお、EMAS が2001年2月に次のごとく改訂されたという最新情報が含まれている。

- 対象を全業種に拡大
- ISO14000の取り入れ
- 登録企業が PR に使えるようロゴの策定
- 従業員の参画
- 透明性の改善

第3日目 (6月28日 木曜日)

セッション V SHE & Q の総合マネジメント

(1) Young-ho, Kim (DNV, 韓国)「SHE & Q 統合マネジメントを評価するツール」

DNV という認証機関による発表で、DNV は世界に105の拠点をもち、これまで32000件の ISO9000認証、2500件の ISO14000認証、2500件の OHSMS 認証を行ってきた。総合マネジメントシステムについてその考えられるメリットをあげているが、最後はマーケット (企業) がよいと

同社は1988年に設立された企業でありエチレン、ポリプロピレンなどを生産している。既にISO9000, ISO14000の認証を取得し、2000年にはKOSHAが行っている安全衛生の認証(BS8800に基づいたKOSHA2000プログラム)も取得している。この多くのマネジメントシステムが存在することによる、管理コスト、重複、他のマネジメントシステムの参照が困難、認証機関が異なるなどの問題点が出たため、これを解決するため独自の統合マネジメントシステムを開発した。並行してネットワークによるデータベース構築も進め、人員減(6名→3名)、管理コスト63%減、業務の効率化等の成果を上げた。

セッションVI 全般討議

これまでの討議をもとに、全般的な討議が行われた。内容についてはセッションVII参照。

第4日目(6月29日 金曜日)

セッションVII 結論案、リコメンデーション案の審議

これまでの討議のまとめ及びリコメンデーション案が44項目にまとめられ、議論・検討された。以下にその概要を記す。

ワークショップ討議のまとめ及びリコメンデーション

I インTRODクシヨン

1. ワークショップは、SHEQの統合マネジメントについて討議、意見交換する機会を提供することである。従って特定の標準の開発を取り扱うものではない。

2. ここでは「Quality」という言葉は、単に製品やサービスの質にとどまらず、マネジメントプロセスの全体の品質を表すものとする。

3. ワークショップの内容は主として有害危険物質の生産・輸送・貯蔵する産業に関するが多かった。

II マネジメントシステムから統合マネジメントシステムへ

4. SHEQ管理の戦略的なゴールは、これらを通常の企業経営にとりこみ、「持続可能な成長」

を可能にすることである。

5. マネジメントシステムの適用は現在の「最適慣行」である。

— マネジメントシステムはPDCA、継続的改善という共通点がある。

— どのようなタイプのリスクを管理するにしても、ハザードの特定、リスクアセスメント(定性的、定量的)、対策、実施、監視とメンテナンスがシステムの要素である。

— システムは実施できるものであること。従ってシンプルな方がよい。

6. SHEQ管理には共通点が多いので、統合は理にかなったステップである。

7. SHEの統合は広く受け入れられ、実施されているというのが一般的な理解であった。さらにQを統合しようという努力もあり、これはTQMへ至るという観点から要フォローである。

III 化学産業の視点

8. SHEQの統合に関しては民間である産業界がリードすべきである。一方政府も全セクターの利害を考慮すべきである。

9. SHEの統合は、企業で広く受け入れられ、実施されている。Qを統合しようというところもある。これにより、SHEQのパフォーマンスがあがり、他に次のようなメリットもある。

— 従業員が自分の役割・責任自覚

— 新しいスタッフを仕事に取り込むことが容易

— 単純化

— ロス、損失、共通の根本原因の除去

— 部門間のコミュニケーション改善

— 顧客・コミュニティとのコミュニケーション改善

10. 統合によりQが改善されれば、リスクが減る。そうするとロスが減り、利益が増大する。社会・会社・株主みな利益になる。

11. 統合マネジメントシステムの策定についていくつかの発表があった。共通のステップとして次のようなものがある。

— 状況/ニーズのアセスメント;

